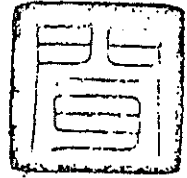


1  
342  
7

七



古賀辰四郎ハ藍綬褒章

下賜ノ件

右謹テ奏ス

明治四十二年十一月二十二日

内閣總理大臣侯爵桂太郎

Small circular mark or stamp at the bottom right corner.



古賀辰四郎へ藍綬褒章

下賜ノ件

右謹テ奏ス

明治四十二年十一月二十二日

内閣總理大臣侯爵桂太郎

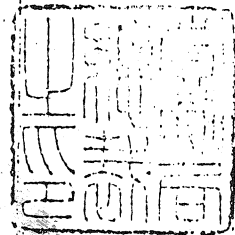
七

雜記

明治四十二年十一月十九日



内閣總理大臣ノ 賞勳局總裁



別紙農商務大臣申牒沖繩縣那霸區字西古賀辰四郎褒賞ノ件審査候處左ノ如シ

資性温良夙ニ海事思想ニ富ミ明治十二年福岡縣ヨリ移住シ那霸ニ本店ヲ置キ爾來殖産ノ業ニ從ヒ銳意多年海産物ノ撈獲輸出ヲ為シ又尖閣列島ヲ探險シテ許可ヲ得識者ニ謀リ永住的設備ヲ施シ以テ移民ヲ勸獎シ水禽ノ剥製鳥毛魚介ノ採收肥料ノ

二 寸 月

製造等多方經營ニカヲ盡シ明治四十年ノ如キハ  
産物採収價額拾參萬四千餘圓ニ達シ且將來年  
ヲ追フテ發展セントス一般水産業ノ進步ニ資シ漁  
民ヲ裨補スル事尠カラス洵ニ公衆ノ利益ヲ興シ成  
績著明ナリトス

因テ褒章條例第一條ニ據リ藍綬褒章下賜  
相成可然ト認定候條此段上申ス

明治四十二年五月廿一日 津尾縣知事 日比重 明

農商省大臣 齋藤實武殿

農商部下賜ノ件ニ付具申

津尾縣那霸通字西九十六番地平氏

高 雄 吉 賀 辰 四 郎

右ノ者性質温良品行方正ニシテ海軍恩惠ニ富  
ニ産業ノ經營ニ著實ナリ明治三十一年以來本縣  
ニ於テ殖産事業ニ從事シ銳意海產物ノ捕獲  
輸出ノ經營ニ其ノ他水禽ノ剝製鳥毛ノ  
採取肥料ノ製造等多方面ニ精勵シテ其

ノ獲達ヲ從カシ殊ニ海産物ノ捕獲ニ關シテ  
 漁民ニ多大ノ利益ヲ與ヘ、迄ニテ一般水産  
 業ノ進歩ヲ業トシ其ノ効勞顯著ナル者  
 卜相徳ノ一條、農章條例、依リ、藍綬農  
 章、法下賜、お成候様、致度別紙、本人ノ履  
 歷書、戸籍簿、本、事、業、經、理、之、書、若、以、通、相  
 係、此、段、具、申、候、也

沖繩縣那霸區字西九十六番地

平民

古賀辰四郎

安政三年一月十八日

右張貴ノ件沖繩縣知事ノ内申ニ依リ審査催成

辰四郎ハ福岡縣ノ産ニシテ資性温良海幸思想ニ富ニ産

業ノ経営着實ナリ沖繩縣下ノ各群島ニハ必スヤ緩多

有用海産物ノ蔵蓄アルヘキヲ想ヒ興業ノ意ヲ決シ明治

十二年二月全縣ニ至リ那霸ニ本店ヲ構ヘ殖産業ニ從事

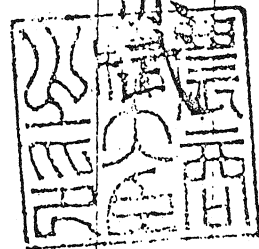
三爾來三十餘年間最多之事故ヲ嘗メ艱苦ト闘ヒ銳意海  
產物ノ捕獲輸出ヲ經營シ又沖繩本島ト清國福州トノ航  
路ノ中夾ニ散在スル尖閣列島ヲ探險シ之ヲ開拓ノ認可  
ヲ得職者ニ謀リ永住的諸設備ヲ施シ移住民ヲ勸奨シテ  
水禽ノ剝製鳥毛ノ採收肥料ノ製造等多方面ノ事業ヲ經  
營シ奮勵努力其後達ヲ圖リ殊ニ海產物ノ捕獲及之ヲ利  
用方法ニ関シ漢民ト與ヘタル利益ハ甚々大ニシテ延テ  
一般水產業ノ進歩ヲ乘シ全縣ニ於ケル新業ヲシテ能ク  
今日ノ隆盛ニ達セシメタルモノ承人ノ熱誠與テ大ニ力  
アリ同人ノ如キハ尙ニ公衆ノ利益ヲ興シ功績顯著ナル



臣ノ下 認候条 褒章條例ニ依リ 藍綬褒章 御下賜相成  
度別紙 沖繩縣知事 上中書類相添 此段及 申譯候也

明治四十二年九月八日

農商務大臣 野村浩平



貴州省 德義伯 壽正 親町 實心殿

明治三十二年以前、履歴

古賀辰四郎

一 明治拾貳年琉球藩シ廢シ沖繩縣シ置カレタル時來縣

ニ專ラ海産物ノ採收ニ從事シタリ

一 今年五月本店シ那覇ニ置キタリ

一 明治拾三年二月八重山石垣島ニ海産物其他視察ノ

為出張シ明治拾五年二月同島ニ支店シ開設シタリ

一 明治拾七年尖閣列島ニ人シ派遣シ同島ノ實況シ探

險セシメ爾來年々勞働者シ派遣シ海産物採收シテ

シメタリ

一 明治貳拾五年尖閣列島經營ノ餘暇シ以テ沖繩關運會

社所有船大有丸(五百四十噸)シ借り入レ自ラ勞働者シ隨ヘ

大東島ノ探險シテシタリ

一 明治貳拾七年尖閣列島、形勢ヲ觀察スルニ全島、國家的福利、一ナルコトヲ信シ茲ニ殖民的經營、切要ニ認メタシハ該島、開拓認可シ本縣知事ニ請願シタルモ當時全島、所屬が未定ナリト、理由シ以テ却下セラレタリ

一 明治貳拾八年尖閣列島事業、開シ自ラ觀察、必要ニ感シ小艇ニ機装シ實地探險ヲナシタリ

一 今年更ニ尖閣列島開拓認可シ内務農商務兩大臣ニ宛テ出願シ傍ラ上京シテ視察、實況ヲ親シク具

陳シ認可シ懇願ヤシモ遂ニ許可シ與ハラレザリシ

時偶々明治貳拾七八年戰役、終向シ皇國大捷、結果臺灣島ハ帝國、版圖ニ歸シ尖閣列島亦カ所屬タルコト貳拾九年勅令第拾參號ヲ以テ公布アリタルニ付重

テ今島開拓認可シ本縣知事請願シ今年九月認可シ與ヘラレタリ

一 明治三十年遠洋漁業改良船シ大阪商船株式會社  
ハ依屬シ今年三月貳艘ヲ建造シ遠洋漁業ニ從事  
シタルニ良好ナル結果ヲ得タリ

一 明治三十一年事業ノ發展ニ伴ヒ益々交通機關必要  
シ星シタルニ依リ大阪商船株式會社ニ協商シ同社所  
有汽船須摩丸一千六百餘噸ヲ借入シ尖閣列島ニ寄港  
セシメ商來汽船ヲ以テ交通ノ便ヲ謀リタリ

鳥糞生產高及價額調

一 明治四十年度

生產高五千斤

此代價壹千參百圓

一 明治四十一年度

生產高八千斤

此代價貳千八拾圓

以上

沖繩縣那覇區宇西九十六番地

明治拾八年四月拾九日大坂市西區長堀北通五丁目八番屋敷轉住

明治拾四年九月拾九日福田縣上妻郡山内村子氏古賀門次郎三男分家

明治拾年拾月拾六日京都府上京区福屋町千民後藤外次訂結入籍不  
明治拾六年拾月拾六日協議離暫實家  
後籍届出同日京都市上京区乃籍更山本長致受附同日  
届君及入籍通知書登送同拾月拾六日京府附附

明治拾八年八月拾六日七月午二時四時死之同日届出同日没附

子民

主

父門次郎三男力

昌賀辰四郎

安政三年九月拾八日生

妻

明治元年四月拾五日生

長男

善次

明治拾六年四月拾九日生

長女

志津

明治拾九年七月拾六日生

明治八年八月於六百若手縣郡鳥海村大字  
西法寺丁三番戸橋摩子伊之松婚姻届出同日受  
附入籍

右藤本戸籍原水相違

明治四年九月廿五日

中絶

妻

明治八年九月於卷生

志

更喜入休

年 月 日



年 月 日生

明治八年三月 日生

明治八年三月 日生

年 月 日生

履歷書

沖繩縣那霸區字西九十六番地居住平民高

古賀辰四郎

安政三年一月十八日生

職務

- 一 明治三十二年十一月奈良原知事ニ隨行シテ南清各方面及香港等ニ於ケル海産物ノ狀況ヲ視察セリ
- 一 明治三十三年六月七日 東京御慶事奉祝會評議員ヲ囑托セラル
- 一 明治三十七年七月 廣運株式會社取締役ニ當選就任ス
- 一 明治三十八年七月 沖繩興業株式會社監查役ニ當選就任ス



一 明治三十八年三月沖繩糖商同業組合評議員ニ當選就任セリ

賞罰

一 明治二十七年十一月八日那覇高等及尋常小學校改築費トシテ金拾圓寄附シ其賞トシテ木杯壹個ヲ受ケ

其ノ褒狀別紙第一號寫ノ通

一 明治二十八年七月十日第四回内國勸業博覽會ノ眞珠 叢穀類 鱈 鱒 海參ヲ出品セシニ有効三等賞ヲ受ケタリ

其ノ褒狀別紙第二號寫ノ通

一 明治二十七八年戰役ノ際軍資金五拾圓並ニ軍用品ヲ献納シ其ノ賞トシテ木杯壹個ヲ受ケタリ

其ノ褒状別紙第三号寫ノ通

一 明治三十年七月二十八日縣下島尻郡具志川間切學資トシ  
テ金貳拾八圓寄附シ其ノ賞トシテ木杯壹個ヲ受ケタリ  
其ノ褒状別紙第四号寫ノ通

二 明治三十年三月十八日聯合共進會(長崎市)ノ海參ヲ出  
品セシニ二等褒賞ヲ受ケタリ

一 明治三十年十一月十二日茅二回水産博覽會(神戸市)ノ鼈  
甲・鮫皮海人草及類・真珠・鱈・鰹・海參ヲ出品シ有効一等  
三等及ヒ褒状ヲ受ケタリ

其ノ褒状別紙第五号寫ノ通

一 明治三十二年三月十五日聯合共進會(鹿児島市)鱈・鰹  
ヲ出品シ三等褒状ヲ受ケタリ

一 明治三十三年佛國巴里萬國博覽會ノ真珠海參及

一 穀類ヲ出品セシニ銅牌ヲ受領セリ  
其ノ褒状ノ寫左ノ如シ

*Republique Francaise*

*Ministère du Commerce, de l'industrie des Arts et des Métiers*

EXPOSITION UNIVERSELLE DE 1902  
LE JURY INTERNATIONAL DES RÉCOMPENSES

DECERNE UN DIPLOME DE  
MÉDAILLE DE BRONZE

à Monsieur Tatsukichi Koga, à Osaka

GROUPE IX - class 53 JAPON

二 明治三十六年七月一日第五回内國勸業博覽會ノ水産物ヲ出  
品セシニ海人草ニ對シ褒状真珠貝殻各種信天翁羽毛等ニ  
對シ三等賞牌貝釦各種ニ對シ三等賞牌海參鱈鱈ニ對  
シ二等賞牌ヲ受領セリ

一 明治三十七年米國聖路易萬國專覽會ノ水産物ヲ出東シ

ルニ金牌壹個銅牌貳個ヲ受領セリ  
其ノ寫左ノ如シ

UNITED STATES OF AMERICA

UNIVERSAL EXPOSITION SAINT LOUIS. MDCCCIX

COMMORATING THE ACQUISITION OF THE LOUISIANA TERRITORY

THE INTERNATIONAL JURY OF AWARDS CONFERRED

GOLD-MEDAL UPON

TATSUSHIRO KOGA OKINAWAKEN

SHELLS AND PEARLS

一 明治三十九年帝國義勇艦隊建設義金貳百圓驀出セシニ  
特別會員ニ列セラレ徽章ヲ受ク

其ノ寫別紙第六号寫ノ通

一 明治三十九年縣下旱害窮民救恤費トシテ金拾圓寄附シ  
其ノ賞トシテ木杯壹個ヲ受ク

其ノ褒状別紙第七号寫ノ通

一 明治四十年十月長崎市ニ於テ關西九州一府十九縣聯合水産  
興進會開催ニ際シ安南列島及ヒ縣下ニ於ケル製造物品ヲ出  
品シタルニ對シ一等賞牌一個二等賞牌二個ヲ受領セリ

其ノ褒状別紙第八号寫ノ通

一 前記出品ノ一等賞ニ對シ長崎商業會議所ヨリ額縁一個褒  
賞ヲ受領セリ

其ノ褒状別紙第九号寫ノ通

褒賞ノ寫

第一号

明治二十七年十一月八日管下那覇高等及尋常  
小學校改築費トシテ金拾圓寄附候段奇特ニ付  
為其賞水杯壹個下賜候事

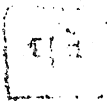
明治二十七年十二月二十五日

沖繩縣知事正五位奈良原繁印

第二号

今類真珠ヲ蒐集シ販額甚タ多ク鱈鱒海參製  
法佳良ニシテ産額少ナカラス共ニ内外ノ需用ニ適ス  
平素其業ニ勉ムルノ厚キヲ徵スルニ足ル  
前記ノ薦告ヲ領シ茲ニ賞牌ヲ授與ス

明治二十八年七月十一日



明治二十八年六月一日 總裁大勲位 彰仁親王 印

第三号

明治二十七八年戰役ノ際報國ノ旨意ヲ以テ軍資ノ内  
ハ金五拾圓並ニ軍用品ヲ献納候段奇特ニ付為其賞  
木杯壹個下賜候事

明治三十年六月一日

沖繩縣知事從四位勲四等男爵 奈良原 繁 印

第四号

明治三十年七月二十八日管下島尻郡具志川間切學資  
トシテ金貳拾八圓寄附候段奇特ニ付為其賞木杯壹  
個下賜候事

明治三十年十二月二十四日

沖繩縣知事從四位勲四等男爵 奈良原 繁 印

明治三十年十月十二日第二回水産博覧會ニ於テ鮫  
甲、鮫皮、海人草、介殼類聚

介殼十三種 真珠九種 有効三等

類聚ノ介貝、真珠品質皆良好ニシテ工用必需ノモノトス  
就中珠母ノ如キハ大形厚質ニシテ光澤太シ多ク場中  
穿ニ見ル所其地方ノ漁業ヲ開キ介貝ノ採集販賣ニ勉  
ムルノ効少ナカラス

鱈、鱈 海參ガジ、マムシニ種

有効一等

漁業製造及ヒ商業ニ從事シ銳意産額ノ増進ト  
製品ノ改良ヲ圖レリ今回出品ノ鱈、鱈、海參ノ如キ善  
ク各種ヲ類聚シ品質製造共ニ良好ニシテ海外需  
用ニ通ス



前記ノ薦告ヲ領シ茲ニ賞牌ヲ授與ス

明治三十年十一月十二日

總裁大勳位功二級彰仁親王 

第六号

本會ノ旨趣ヲ翼賛シ帝國義勇艦隊建設義金ヲ

醸出セラル因テ會則ニ據リ特別會員ニ列シ茲ニ徽章

ヲ贈與ス

明治三十九年四月九日

帝國海軍協會總裁

大勳位功四級威仁親王 

第七号

管下旱害窮民救恤費トシテ金拾圓寄附候段奇

奉持ニ付キ為其賞木杯壹個下賜候事

明治四十年一月十九日

沖繩縣知事正四位勲二等男爵奈良原繁 印

第貳号

鱈魚海參一等賞金牌

審査長正五位勲四等神山閏次 印

右第貳回關西九州府縣聯合水産共進會審査長

ノ薦告ヲ領シ茲ニ之ヲ授與ス

明治四十年十二月一日

農商務大臣從四位勲一等松岡康毅 印

總節二等賞 銀牌

審査長正五位勲四等神山閏次 印

右第貳回關西九州府縣聯合水産共進會審査長ノ

薦告ヲ領シ茲ニ之ヲ授與ス

明治四十年十二月一日

農商務大臣從位勲一等松岡康毅 [印]

真珠二等賞 銀牌

審査長正五位勲四等神山岡次 [印]

右等二回西九州府縣聯合水産共進會審査長

薦告ヲ領シ茲之ヲ授與ス

明治四十年十二月一日

農商務大臣從位勲一等松岡康毅 [印]

銀杯

夙心ヲ沖繩縣郡島ノ殖産ニ致シ銳意海産物ノ捕

獲及ヒ輸出シ經營シ八重山群島ノ漁業ヲ開祭シ又

無人ノ尖閣列島ニ探檢ヲ試シ魚介ヲ捕獲水禽


剝製等ニ力ヲ專ラ移住ノ先導ヲ為ス其間刻

苦經營多年洵二日ノ如シ其功績補揚スヘシ仍テ茲  
ニ之ヲ賞ス

審査長正五位勲四等神山閏次 

右茅二回關西九州府縣聯合水産共進會審査長薦  
告ヲ領シ茲ニ之ヲ授與ス

明治四十年十二月一日

農商務大臣從二位勲一等松岡康毅 

第九号

目錄

一 額縁 壹個

今回茅二回關西九州府縣聯合水産共進會ノ賞下  
御出品ノ鱈鱈現今秋水産輸出貿易品中最モ顯著  
ル發達進歩多クシ國家ノ利益スル所甚ク大ナリトス之

ル全ク貴下及ニ當業者諸氏ノ斯業ニ忠實奮勵  
セラル結果タラスシハラス因テ當會議所ノ尚將來之  
獎勵ノ一端トシテ一等受賞者タル貴下ニ對シ茲ニ前  
記目錄ノ物品ヲ贈呈ス

明治四十年十二月一日

長崎商業會議所

會頭 永見寛二印

明治四十年十二月一日

永見寛二印

長崎商業會議所

永見寛二印

印

永見寛二印

長崎商業會議所

事業經營

事業經營

目次

一 沖繩縣下、於此起業

二 八重山支店、開設

附全嶋產業狀態

三 無人島探檢、志望

附永住的經營、着手

四 尖閣列島、探檢

五 尖閣列島開拓、認可

附探檢後認可、至此事業上、經歷

六 開拓認可後、經營方針

附改良遠洋漁業船、建造縣民一部感觸

全島ニ於テ交通ノ不便及荷役ノ困難

七 尖閣列島ニ對スル技術上ノ設計

八 尖閣列島ニ於テノ産業經營ノ梗概

九 永久ノ勞働者移植ノ計畫

一〇 自明治三十年至明治四十年ノ十五年間尖閣列島事業經營費汽船

航海回数及產物採収價額

(一) 自明治三十年至明治四十年 事業經營費

(二) 自明治三十年至明治四十年 汽船航海回数

(三) 自明治三十年至明治四十年 產物採収價格

二 明治四十年年度以降尖閣列島經營豫算書

(一) 支出ノ部

(二) 收入ノ部



一三 本縣官吏、列島視察

一三 尖閣列島以外、無人島探檢及其經營

(一) 大東島、探檢

(二) 久キマ島、探檢

(三) セキビ島、探檢

(四) 沖、神島、探檢及其經營

一四 沖、神島ニ於ケル事業、梗概

一五 (附錄) 難破船、救護

一六 (附錄) 地圖及寫真

# 事業經營

一 沖繩縣下ニ於ケル起業

古賀辰四郎ハ別紙履歷書ニモ記載ノ通り福岡縣出生ノ者ニ有之始メテ沖繩縣下ニ來リ海產物ノ採集捕獲ノ業ニ從事シタルハ明治十二年二月ニシテ時恰モ琉球藩ヲ廢シ沖繩縣ヲ置キタル年ニ屬セリ是ヨリ先木人ハ沖繩各群島ニハ必スヤ幾多有用ノ海產物ノ藏蓄アルヘキヲ想ヒ興業ノ意ヲ決シテ本島ニ來航スルニ至レリ其着スルヤ自ラ沿岸ヲ巡視シ漁夫ヲ傭ヒテ海中ヲ探ラシメタルニ果シテ產物ノ豊富タルヲ認メ茲ニ初メテ本業ニ從事スルノ端緒ヲ開ケリ當時本島ニ於ケル一般ノ民度尚

未タ幼稚ニシテ就中經濟思想發達セズ是等天產  
物ヲ利用スルノ念殆ビトナク僅ニ自給自足ヲ以テ  
満足セルノ状態ニ在リシカ故ニ海中ノ產物ヲ採収スル  
モノナキニナラス彼ノ工業用トシテ高價ノ販路ヲ有スル  
貝類則チ夜光貝、高瀨貝、廣瀨貝等ノ如キ莫大ノ  
貝殼ハ唯其肉ヲ食シタルノミニ之ヲ放棄シ聊カモ愛  
惜スル所ナキノ有様ナリキ本人ハ先ヅ是等ノ状態ヲ目  
撃シテ慨歎シ本島ノ海產物ヲ採収シ之ヲ利用シテ國  
家ノ福利ヲ増シ縣民ノ經濟ヲ進メサルヘカラストナレ爾  
來三拾年間ノ星霜ヲ此ノ目的ノ爲ニ消費シ其間幾  
多ノ辛酸ヲ嘗メ艱苦ト闘ヒ經營ノ多クヲ盡シ以テ  
本縣人民ノ海產業ノ有利ナルヲ知ラシメ兼テ縣下

無人島タル尖閣列島ノ經營及ビ沖ノ神島ニ於ケル事業ノ基礎ヲ作ルコトヲ得タリ

本縣下當時ノ状態ガ斯ノ如キ有様ナリレカ故ニ本人此ノ目的ト希望トヲ達スル手段トシテハ先ツ縣内樞要ノ地ニ店舗ヲ設クル必要アルヲ以テ來縣ノ年則チ明治十二年五月那覇ニ本店ヲ構ヘテ附近ノ人民ヲ誘導シ是等無數ノ貝殻類ヲ購入スルコトニ着手セリ之レ本人ガ薄資ヲ以テ孤身奮闘能ク今日ノ成功ヲ贏チ得タル事業經營ノ第一歩ナリトス

試ニ當時購入貝類ノ代價ヲ記サンニ夜光貝ノ如キハ大ナルモノ一個ニ錢若クハ三錢又高瀬貝廣瀬貝ノ如キハ百斤三四拾錢ニテ容易ニ購入シ得タル次第ニテ人民ノ海

産物ニ對スル思想ノ幼稚ナリシヲ知リ得ヘシ本人是  
等ノ貝類カ先ツ外國商館向ノ適當品ナルヲ見込  
之リ神戸港ノ外商ニ齎ラシ協商スル所アリ此等ノ貝  
類年々三四拾萬斤ヲ賣込ニ其賣上代金ヲ以テ海  
産物ノ開拓事業ヲ進捗セシムルノ資ニ供シタリ  
其ノ後是等ノ貝類ハ次第ニ好況ヲ以テ外商間ニ迎  
ヘラレ大販路ヲ擴張シ得ルノ見込確定シタルヲ以テ明  
治十五年二月縣下ノ最遠隔離島一タルハ重山石垣島  
ニ支店ヲ設置シ島民ノ漁業ヲ勸奨シ傍ラ本業タル  
貝類其他海産物ノ輸出ニ努力シ大ニ啓發スル所アリ  
シニ縣民中漸ク斯業ノ有利ナルヲ覺ルモノアリテ直接外  
商ニ販賣ヲ契約スルモノモ七顧ハルニ至レリ而シテ神戸

於ケル外商ノ貝類買込ニノ趨勢ハ自然競争ノ姿トナリ且  
ツ原價モ次第ニ騰貴シテ本人ガ最初外商ヘノ賣込價  
格ハ百斤壹圓内外ナリシガ原價ノ騰貴ト共ニ外商ノ買  
込價格モ昂騰シテ高瀬貝ノ如キハ百斤二圓三圓トナリ  
五六圓ト次第ニ高ク遂ニ百斤ニ拾五六圓ノ突飛ナル高  
値ヲ呼ブニ至レリ去トハ縣ノ内外ニ於テ斯業ニ注目スル  
モノ漸ク多ク坂神方面ニ於テハ本縣産ノ貝類ヲ以テ  
紐釦ノ製造業ヲ起スモノサヘアルニ至レリ斯クテ本縣  
ノ貝殼類ニ對スル需用ハ一般貝類工業ノ發達流行  
スルト共ニ益増進シテ其後印度南洋方面ヨリノ原料  
貝殼ノ輸入ヲ見ルニ至ルマデハ頗ル高値ヲ保ツトヲ得タ  
リ此外本人ハ鰯、鼈、甲、鱧、鱈、海參等ノ水産物ノ製造ヲ

獎勵シタルニ清國向需要品トシテ支那商人ノ歡迎スル處  
トナリ其後年々盛況ヲ呈シ當今ニ於テハ本縣重要物  
産ノ一ニ數ヘラルニ至レリ

以上ハ本人が事業經營ノ當初ニ於テ先ツ海産物輸出  
ヲ試ミ縣下ノ産業上ニ貢獻シタル点ナリトス

### ニ八重山支店ノ開設

附同島産業ノ状態

本人ハ明治十五年二月事業ノ發展上八重山島ニ支店ヲ  
開設シタルコト前掲ノ如シ元來此ノ島ハ縣下最遠隔ノ一  
離嶋ニシテ土地肥沃風土適善ナルガ爲動モスルハ人民安  
逸ニ傾キ易ク從テ企業ニ心少ク魚介ヲ漁獲シテ一般ノ  
利益ヲ進メントスルノ念慮乏キハ前記沖繩本島ニ於ケル

ト異ナル所ナリ随テ該島附近ノ海産物ハ舊藩時代遺  
習ニ從ヒ鼈甲ノ採集位ノモノカ極メテ舊式ヲ以テ行ハ  
レタルノ外何等ノ見ルヘキモノアラサリキ其他鬱然トシテ  
繁茂セル山林樹木ノ利用上ニ遺憾ノ廉多カリシカ故  
ニ支店開設以來勉メテ魚介ノ採集上出来得ル文ヲ進  
歩セル方法ニ據ラシムルコトヲ勸誘スルト共ニ野生樹木  
中ヨリ鳥糞ヲ製造スル方法ヲ教ヘテ自然物ニ加工スル下ノ  
如何ニ利益アルカヲ知ラシメタリ然ルニ其ノ効果空シカラズ  
海産物ニ於テハ外國輸出品トシテ木人カ經營ニ属スル  
モノ次第ニ隆昌ニ趨キタルノミナラス全島ニ於ケル鳥糞ハ  
縣外輸出品トシテ益々發展ノ域ニ進ミツマアリ

三 無人島探検ノ志望



三 附永住的经营、着手

本人が無人島探検の志望ハ國家的福利ヲ進メント欲スル一念ニヨリテ益々熱心ノ度ヲ高ムルニ至レリ殊ニ本縣下ニ来リテ地理形勢ヲ觀察シ且當時ニ於ケル清國トノ國際關係上ヨリ考フルモ從來帝國臣民、著手セザリシ附近ノ屬島ニ對シテ殖民的經營ヲ始ムルハ最モ切要ノ業ナリト信シタルヲ以テ尔来コレが探検ノ志望ヲ抱キ只管機曾ノ到来ヲ俟テリ、  
本人ハ先ヅ無人島探檢及ヒ其ノ經營ガ尋常ニ準備下ニ行ハルヘキニアラサルヲ知リ其初志ヲ確實ニ貫徹セシガ爲ニハ永住的經營ヲ爲スノ必要ヲ認メ明治八年四月本籍ヲ此地ニ移シ專心斯業ニ從事スルコト、

セリ然ルニ是等事業ノ發達ヲ助クルニ最モ必要ナル  
交通機關ハ頗ル不便ヲ極メ僅ニ定期郵便船トシテ  
一ニ小汽船ノ大阪那覇八重山間ヲ往復スルアルニ而カ  
モ其一航海ハ常ニ月餘ヲ要シ加フルニ發着時間ノ  
不規則不正確ナリシガ爲ニ運輸品ノ遲着停滯ハ普  
通ノ事ニシテ商機ヲ錯リ失敗ノ悲運ニ遭遇セシト帝ニ  
一再ニ止マラサリキ

#### 四 尖閣列島ノ探檢

尖閣列島ハ東經百二十三度北緯二十五度ノ洋中ニ在ル最  
アルタル無人ノ小列島ニシテ拾モ沖繩本島ト清國福州ト  
ノ航路ノ中央ニ位シ其列島ハ釣魚島黃尾島南小島  
北小島ノ四個ノ小島ヨリナレリ

外人其位置ニ鑑ミ全島ニ植民的经营ノ必要ナルヲ  
認メ明治十七年始メテ人ヲ派遣シ該島ノ實況ヲ探檢  
セシメタリ而シテ其探檢者ノ報告ニヨリ全島ノ事業ノ  
经营ニ適セルコト及ビ其ノ島嶼ノ形勢大要ヲ知ルコトヲ  
得タルヲ以テ多年ノ宿望ヲ達スルノ機會到來セリトナ  
シ更ニ人ヲ派シテ試ミ全島ニ於ケル鳥毛及ビ海產物ノ採  
捕ヲ爲サシメタリ斯クテ全島ニ於ケル是等ノ產物ノ外國  
輸出品トシテ適當ナルノレナラス内地ニ於テモ相當ノ賣  
行アル物品ノミナリシヲ以テ爾來拾有餘年ノ間年々勞  
働者ヲ派遣シ其ノ採捕ノ怠ル所アラザリシガ明治二十  
八年ニ至リテ該島ノ事業大ニ起スヘキ機會ノ到來セシメ  
以テ自テ小艇ヲ機裝シ實地探檢ニ赴ケリ此行風濤險

惡シテ航行甚ク危険ナリシモ幸フシテ列島中ノ一嶼ニ上陸  
スルコトヲ得タリ則チ全島ヲ視察スルニ樹木ハ繁茂シテ原  
野耕スヘク無數ノ水禽ハ群棲シテ手モテ捕フヘク沿岸  
亦海産物ニ富ミ前途甚ク有望ナルヲ覺知シタリ  
右視察シタル列島ニハ大ナルモノ一アリ其面積ハ約四方  
里ニ達シ他ハ約一方里アリ大ナルモノヲ釣魚島一名和平  
山ト云ヒ小ナルク場島一名黃尾島ト云フ最初探検當  
時上陸シタルハ乃チ列島中ノ久場島ナリトス  
五 尖閣列島開拓ノ認可  
附探検後ヲ認可シ至ル迄ノ事業上ノ經歷  
本人が尖閣列島開拓ノ認可ヲ得タルハ明治二十九年九月  
ナリトシ是ヨリ先本人が全列島ニ對スル事業ノ端緒ハ明治

十七年ニ開カレタルエト前段記スル所ト如シ斯クテ其後  
年々出稼労働者ヲ派遣シ全島産物ノ採集ニ從事  
セシタルニ急ラザリシエト又前段ニ略記セシ如クナルガ右勞  
働者ヲ募集スルニ就テハ甚ク困難ナル經驗ヲ嘗メタリ  
蓋シ全島ガ絶海無人ノ島嶼タル故ヲ以テ危險ヲ恐レ  
出稼ヲ希望スルモノナキハ勿論勸誘ニ應ズル者皆無ザリ  
シエト之ナリ尤モ當時縣下一般ノ民情ガ比較的海國  
的進取ノ氣象ニ乏シカリシハ其重ナル原因ナリシナルヘシ  
故ニ本人ハ此ノ労働者ヲ得ンガ爲ニ實ニ勸誘百端ノ  
勞ヲ盡シタリ而カモ其ノ僅ニ募リ得タル所ノ者ハ老人ニア  
ラザレハ郷土ニ於テ労働ノ途ヲ得サル種類ノモノニシタルガ  
故ニ到底完全ナル労働者ト云フエト能ハサルナリ然ルニ彼

等ハ驚クヘキ多額ノ債銀ヲ要求セリ當時本縣ノ物價  
極メテ安値ナルニ食糧煙草其他凡テノ日用品ヲ給與シ  
タル上尚ホヶ月金拾五圓乃至貳拾圓ヲ得ント希望セリ  
本入ハ只管ニ是等ノ小障礙ニ依リ事業ヲ中廢センコトヲ  
遺憾トシ債銀ハ彼等ガ要求スル儘ニ支拂ヒ一航海ヲ限  
リテ雇用スヘキ契約ヲ結ビ滯島期間ニ要スル一切ノ糧食  
及ヒ其他ノ給養品ヲ整ヘ始メテ發航セシメ得タルナリキ  
コト全島第一次探檢ノ際ニ於ケル事實ナルカ其後トモ年  
々全島ニ於ケル產物採集時期ニ際シテ勞働者ヲ派遣ス  
ルニ方リテハ毎回右ト全様ナル苦心ヲ重ネタリシガ是等勞働  
者ノ歸還スルモノ漸ク其業ニ習熟シ其ノ土地ニ慣ルニツ  
シ全列島ニ於ケル彼等ノ勞働ガ意外ニ容易ニシテ収入多

キモノタルトヲ知リ且ソ之ヲ彼等ノ朋友知己ノ間ニ吹聴セシ  
ニヨリテ漸次全列島出稼労働ヲ志望スルモノアルニ及ヘリ斯  
クテ明治十七年ヨリ殆ト拾有餘年間右ノ如キ苦心ヲ以テ  
出稼人ヲ募集シ漸ク志望者ノ増加スルニ随ヒ労働者ノ  
選擇ヲ行ヒ得ルニ至リシハ事業ノ経営上誠ニ便宜ノ一  
事タリシナリ而シテ又本縣民ニ移民ノ先導鼓吹ヲナレ遂  
ニ移民繁榮ノ基礎ヲ成シ得タリ又以上ノ如クニシテ當時最  
大困難ニシテ出稼労働者ヲ募集スルニ至リテ漸ク其ノ緒ニ就キ  
タルノミナラス其後全島ノ産物愈々有望ナルヲ確ムルニ至リテ  
明治二十七年全嶋開拓ノ認可ヲ本縣ニ出願シタリ然ルニ當  
時全島ノ所屬ガ帝國ノモノナルヤ不確定ナリトノ理由ヲ以テ却  
下セシメテ更ニ本人ハ内務農商務兩大臣ニ宛テ願書ヲ提出

セリ而シテ傍ラ上京シテ視察ノ實況ヲ親シク具陳シ開拓ノ認  
可ヲ懇願セシモ尚ホ許可リ與ヘテハ至ラサリシガ時偶々  
明治二十七八年戦役ハ終局ヲ告ゲ皇國大捷ノ結果トシテ  
臺灣島ハ帝國ノ版圖ニ歸シ尖閣列島亦我ガ所屬ト  
スル明治二十九年勅令第十三號ヲ以テ公布アリタルニヨリ  
直ニ重ネテ全島開拓ノ認可ヲ本縣ニ出願シ今年九月  
之ガ認可リ与ヘ茲ニ漸ク本人ガ全島ニ對スル多年ノ宿  
志ヲ遂ケルコトヲ得タリ

### 六 開拓認可後ノ經營方針

附改良遠洋漁業船ノ建造、縣民  
一部感觸全島ニ於ケル交通ノ  
不便及ヒ荷役ノ困難



明治七年以降本人が全島ニ對スル經營方針ハ單ニ年々  
或時季ニ際シテ店員及ヒ出稼勞働者ヲ派遣シ鳥毛魚  
介ノ採集リ為スノシヤリレカ開拓認可後ハ永遠ノ基礎ヲ  
定メシガ為ニ全島ニ永住者ヲ送り断然植民の經營ヲ籌  
畫ヲナスニ決セリ然レトモ當時本縣下一般ニ用ナラレタル船舶  
ハ脆弱ナル琉球形船ニアラサレハ刻舟ノミニ止テ到底遠洋  
漁業ノ用ニ堪ヘサルノミナラス無人島經營ノ交通機關トシテ  
ハ甚ク危険ナルリ以テ此ノ事ヲ決行スルニ先タテ豫メ大阪  
商船株式會社ニ依頼シテ二艘ノ改良遠洋漁業船ヲ建  
造スルコトニ定メタリ斯クテ右ノ船舶ハ明治三十年ニ至リテ  
落成セルヲ以テ先ツ之ヲ八重山島ニ送り全年三月始メテ全  
島ヨリ出稼移民三拾五名ト糧食其他一切ノ日常用品ヲ積

載し尖厓列島へ向て出帆せしメタルモ移民ハ内地形船舶  
操櫓ノ法ヲ解セサリキ是レ琉球形船舶ハ風帆ニ依頼シテ  
櫓ヲ用キス刳舟ハ主トシテ手櫂ヲ用フルハ此ニシテ他術ヲ要  
セサルニヨリ一般ノ人民全ク此ノ術ヲ知ラサルニ依ルナルヘシ故ニ  
此新造船舶ヲ派遣スルニ臨ミ本人ハ自ラ師トナリテ斯術ヲ練  
習セシメタリ

斯クテ此ノ絶海ノ孤島ニ移民ヲ行フニ方リテ伴ヒ来ル所ノ  
苦心ノ最大ナルモノハ如何ニシテ移民ヲ安全ニ生存せしメ  
得ヘキカニアリタリ蓋シ糧食ノ補給ハ云フ迄モヤク雨露ヲ  
凌グノ方法及ビ一般ノ衛生上疾病災難ニ對スル救護ノ  
方法ヲモ講セサルヘカウサルヲ以テナリ然ルニ本人ガ此事ニ對  
シテ多大ノ苦心ヲ拂ヒ居ル時縣民ノ一部ニハ本人ガ今回ノ計

劃シ以テ輕躁無謀ノ業ナリト非難詆笑シ或ハ惡言ヲ流  
布スルモノサヘ現ハルニ至リソルモ本人ハ之カ爲メ却テ反抗ノ  
念ヲ高メ意志愈々鞏固トナリタリサレド又彼ハ沈思熟考  
シ萬一災禍ニ罹リ三十有餘ノ移民リシテ彼ガ犠牲者タラ  
シムルカ如キコトヲシカリ危懼スル念ニ堪エサリシ然ルニ幸  
シテ最初ニ移民ヲ送遣シタル此ノ二艘ノ改良漁業船ハ天  
候平穩何等ノ故障モナリ往復ニテ餘日ヲ費シテ全島ヨリ  
採集ノ貨物ヲ積載シテ無事歸還セリ更ニ今年四月糧  
食具、他ヲ積込ニテ派遣シタリシニ翌明治三十一年五月結  
果頗ル良好ナルノ報知ヲ齎セシリ以テ存人ハ大阪商船株式  
會社ト協商スル所アリ全會社ノ所有汽船須摩丸(千六百餘噸)  
ヲ借入レ自ラ移民五十名ヲ引導シ糧食日用器具各種ノ材

料等ヲ準備シテ首途ニ就ケリ

本人が此ノ渡航ハ全島ノ移民計劃ノ基礎ヲ確立セントノ希望ナリシカ故ニ暫時島内ニ滞留スルコトセリ而シテ先ツ是等移民ノ家屋ヲ与ヘシガ爲メ建築ニ着手シテ井ノ堀數千原野ヲ拓キ甘藷野菜ノ類ヲ栽培スル等以テ專ラ航海杜絶不時ノ災厄ニ備フル設備ヲ整ヘテ先ツ本店ニ帰還セリ此設備タルヤ幾百ノ移民等リシテ稍ヤ安全ニ土着の生活ヲサカシメ且ツ開墾其他本島事業ノ基礎ヲ鞏固ニスルニ因トアレリ

本人ノ事業進行上最モ困難ヲ感セシハ全島ニ於ケル荷役が如何ニ不便ニシテ亦航海が如何ニ不自由ナリシカノ點ナリトス抑モ右尖閣列島ノ地形タルヤ海洋孤懸ノ島嶼ニシテ

断崖四壁ヲ繞ラレ天候少シク不穩ナルハ澎湃シテ怒濤其  
ノ壁ヲ打チ絶エテ港ラシキモノ無キノミナラズ洋中遠ク岩  
礁相連ナリ瀬浪ハ高ク之ヲ洗ヒ且ツ黒潮常ニ急駿ノ速  
度ヲ以テ流ルニ故ニ舟ヲ寄スルニハ甚ク困難ヲ極ム曩ニ  
全列嶋航海用トシテ本人ノ特ニ建造シタル改良遠洋漁業  
船ヲ以テスルモ容易ニ陸岸ニ近ツクコト能ハス況ンヤ今六百  
餘噸ノ汽船須摩丸ノ如キハ到底陸岸ニ近ツキ得ヘカテ  
ス遠ク海洋ノ間ニ投錨シ物貨ノ陸揚積込ヲササルヲ得  
サルカ故ニ甚クサカラス不便ト非常ナル危険トヲ感シタリ斯クテ  
陸岸ヨリハ用意ノ制舟數艘ヲ漕キ寄セ來リテ本船ト荷  
物ノ受授ヲヤセシモ前述ノ如キ有様ナルカ故ニ本船ハ左右上  
下ニ動搖シ制舟ハ掀翻セラレテ其仕事リ爲スコト能ハス爲ニ

覆没ノ難ニ遭フ事亦一再ナラザリレリ以テ荷役ノ際ニ常ニ  
島内上下リ舉テ赤裸トナリ事ニ從フノ有様ナリキ  
右ノ状態ナルガ故ニ一物一貨トシテ危險ヲ冒スエトナクシテ本  
船ト荷役ヲ行ヒタルハナリ況ニヤ其ノ後幾度ノ渡航ヲ試  
ムニ方リテ一西回ハ借入船ヲ以テシタルモ其ノ他ハ悉ク皆他人  
ノ所有汽船ニ倚頼シ本船ノ航路ヲ列島ニ迂行セシムルモノナ  
ルガ故ニ船長ハ無徑駛ル爲メ遙ニ島影ヲ望ニテ危險ヲ恐  
レ成ルハク遠ク陸岸ヲ離レテ投錨セントスルモノアリ或ハ避難  
港ナキ洋中ニ在リテ天候ノ激変ヲ危ニ數時間ノ停船ヲ  
急クモナリ旅客ニシテ右ノ回航船内ニ便乗セルモノハ多少  
ノ不平ヲ訴ヘテ已マサル等尚ホ諸事ノ困難枚擧テ遑アラ  
ス其ノ困難心痛ハ實ニ察スルニ餘アリ

七、光閣列島ニ對スル技術上ノ設計

光閣列島ニ對スル移民計劃ガ結果良好ナルヲ見ルヒツケ  
本人ハ其ノ第二次ノ計劃トシテ前記ノ如キ物賃ノ運搬賃  
物ノ揚卸レ等ニ際スル海陸ノ不便ト危險トヲ排除スルノ  
必要ヲ感レタリシ本人ハ其他尚ホ全列島ニ技術上ノ設計  
ヲ加ヘテ事業ノ將來ヲ開展セシムヘキ必要アルヲ以テ其事  
ヲ諮ラシカ爲明治三十三年上京シテ東京帝國大學教授  
理學博士箕作佳吉ニ事情ヲ陳シテ其ノ考案ヲ煩ハレタ  
リ然ルニ全博士ハ本人ガ此ノ企圖ニ多大ノ同情ト熱心トヲ  
拂ヒ理學士宮島幹之助ヲ推舉セラレタリシガ故ニ本人ハ  
則チ全人ニ全島ニ對スル技術上ノ設計ヲ一任スルヲナシ相  
携ヘテ歸縣セリ此ノ外全島經營ニ就テハ尚ホ他ニ必要アル

量し其の出張り乞ヒタリ斯クテ今年五月共ニ借入汽船  
永康丸(大坂商船株式會社 所有四百六十噸)ニ同乗シ先ツ久場島ニ上陸シ  
實地ニ就テ親シク兩人ノ指導ヲ受ケ大略左ノ如キ設計  
ヲ定メタリ

一 鳥類魚介ノ濫獲ヲ戒メ繁殖法ヲ講シ種族斷絶  
ノ憂ナカラシムルコト

二 家屋ヲ建テ移住者ノ安息ヲ圖ルコト

三 久場島ニハ河泉ノ依ルヘキモノ無キガ故ニ天水貯  
槽ヲ設クルコト

四 船着ノ安全ト海陸運搬ノ利便ヲ圖ル爲メ碇繫  
所ヲ築クコト



五 道路ヲ開鑿シ軍ホテ汚穢物排除ノ方法其他

衛生的設備ヲ講スルコト

右ノ設計ヲ遂行セシカ爲ニ水槽築設用トシテ煉瓦セメ  
ント等其他ノ材料ハ遠ク之ヲ内地ヨリ仰ガ小港灣ヲ  
築クニ附近海陸ノ岩礁ヲ破碎スル爲工業用爆裂藥  
ヲ用サル等一切ノ準備ヲ整フルコトセリ而シテ是等ノ材  
料ヲ内地ヨリ輸入シ來タルニ就テモ煉瓦セメントノ陸揚ハ  
甚ク困難ヲ感シタリ殊ニセメントノ大樽ヲ荷上ゲスル爲メ  
本船ノ動揺ト舢舨ノ掀翻ト兩々相待シテノ困難ハ實ニ想  
像ノ外ニアリタリ然ルニ是等艱難ヲ凌キ輸入シ來リタル材  
料ヲ以テ工事ヲ行フニ方リテヤ幾多ノ障礙ニ出會ヒ設  
計ヲ變更更シ位置ヲ轉移スル等屢々ナリシカ故ニ其都度

右ト等じキ艱難ヲ繰返シ材料ヲ輸入シ設計ヲ新ニセカ  
ルヘカヲサルレ是等モト本人ガ設計ノ粗漏職由スト雖モ又  
以テ絶海無人ノ島嶼ニ於テ薄資リ以テ事ニ從フノ如何ニ  
困難ナリシカラ察知スルニ及ル又碇繫所ヲ築クニ方リテ陸  
上ノ岩壁ハ之ヲ碎クニ時ヲ選ハサレトモ海中ノ岩礁ハ干潮時  
ヲ待ツノ要アル等其ノ他幾多ノ障碍ノ因ヲナレテ工事意  
ノ如ク進捗セズ遲クトシテ今尚ホ竣工ニ至ラズ  
而シテ是等工事ノ次第ニ進捗ヲ見ルト全時ニ明治三十四年  
五月借入汽船仁壽丸(四百六十噸)ヲ送遣スルニ當リ本人ハ  
本縣技師熊倉工學士ノ出張ヲ乞ヒ共ニ全列島ニ航行  
シ今年八月マテ滞在シ諸般ノ改善ヲ計劃シ更ニ左ノ  
新設計ヲ案セリ

一 海鳥ノ卵及ビ雛兒ノ風浪ニ略奪セラル、ヲ擁護  
ニ且家屋漁船、安全ヲ圖ル為ニ海岸、要所  
ニ防波堤ヲ築クコト

此ノ工事モ亦種々故障、為メ幾多々ノ費用ト勞力ト  
ヲ浪費シテ幾度カ設計ヲ変更シタル後漸クニシテ  
之カ工ヲ竣ヘタリ

ハ 尖閣列島ニ於ケル産業經營ノ梗概

尖閣列島ニ對スル産業經營ノ大要左、如シ

一 鳥毛ノ採集、水禽ノ剥製

二 鱧鱗、海參、貝殼、鼈甲、漁獲採集

三 鯉、漁、鯉節ノ製造

五 開墾及ヒ穀菜ノ栽培

六 汽船ノ購入

七 珊瑚採集

八 鳥糞ノ製造

九 牧畜

十 養蠶蠶

十一 罐詰製造

十二 燐礦鳥糞ノ採掘

右ノ内鳥毛及ヒ鱈鱗海參貝殼鼈甲ノ採収ハ明治十

七年到島探検後ヨリ着手シ来レルモノナリ 鯨ノ漁撈モ

風ニ行ヒ来レル所ナルモ明治三十八年始メテ 鯨船ノ新造

シテスヨデハ割舟ノ延繩ニテ小規模ノ漁撈ヲナセシニ過キヤ

然ルニ全列島ニ於テハ鯉漁ノ有望ナルヲ第一ハ食餌  
ノ潤澤ナルト鯉ノ魚群ガ極メテ近山岸ニマテ來集スル  
ニヨリ必スシモ遠洋ニ出漁スルノ要ナキ等孰シモ天與ノ  
好適地ナルニ由リ從來ノ規模ヲ擴張スル為前記ノ如  
ク明治三十八年初メテ内地ニ於テ鯉船ニ艘ヲ建造シ  
之ヲ全列島ニ送遣セリ加之斯業ニ熟練ナル漁夫及ヒ  
鯉節製造人數十名ヲ宮崎縣下ヨリ雇入レ其業ニ從  
ハシメタリ而シテ其成績ハ頗ル見ルヘキモノアリシガ不幸ニ  
シテ半途激烈ナル暴風ノ襲撃ヲ遭ヒ漁船ハ三艘共ニ  
破碎セシテ多大ノ損害ヲ被リタリサレド人命ハ別條

ナカリシハ不幸中、幸ナリキ

全列島ニ於テハ鯉漁ノ有望ナルハ既記ノ状態ナルガ故越

エテ翌明治三十九年更ニ鯉船五艘ヲ新造シ尔東一層ノ  
好成绩ヲ収メテアリ又本人ハ水禽ノ剥製ハ欧米諸國ノ  
婦人帽子裝飾用トシテ充分ノ需用アル事ヲ兼テ知リ  
タルモ製鳥ノ職人ヲ得ル事容易ナラス屢々東京横濱其  
他各地ニテ之ヲ求メタルモ得ル能ハス斯業者ニ問合スモ猜忌  
ノ念ヲ以テ之ヲ迎ヘ秘シテ教ヘズ爲ニ心ヲラスモ放棄シテ  
数年ヲ経過セシカ明治三十六年上京種々苦心ノ末漸ク  
十數名ノ職人ヲ得テ歸レリ而シテ翌三十七年「アイサシ」  
「カワラドリ」其他雜禽ヲ剥製又ハ毛羽トシテ初メテ横  
濱神戸ノ外高價ニ賣込ミタルニ望外ノ好評ヲ博シタリ尔  
東年々輸出増加ノ方ニシテ去ル明治三十九年度ニ於テハ  
貳拾餘萬羽ヲ輸出シ四十年年度ニ於テハ約其ニ倍以上

採取引行へり。樟苗ヲ栽植シタルハ明治三十九年事ニ屬ス而シテ全島ノ風土ハ樟樹栽培ノ好適地タルヲ信シタルヲ以テ本年十一月臺灣總督府附屬試驗場ヨリ樟苗三万本ヲ購入シ釣魚島久場島ノ二嶋へ植付ケシニ發育大ニ良好ナルヲ以テ爾後年々植付ヲ行フ事ヲ決セリ。全列島ニ於ケル移民ノ數多キヲ加フルト共ニ開墾ノ事業ハ益々急諸ニ附スヘカラスルヲ以テ此ノ點ニハ少カラス資力アリ傾注シタル結果現今開墾ノ地積六拾餘町歩ニ達ス。至レリ而シテ栽植物ノ種類ハ重ニ雜穀甘藷野菜類等ニシテ日々移民ノ給養ヲ充シツアリ斯クテ其後移民ノ總數ハ漸ク増加シタルヲ見ルニ及ビテハ開墾ノ事ハ益々急進スルヲ期スルニ至リ。

墾地積ヲ戸口ニ割當ツルハ一戸ニ付六反歩餘一人ニ付二反四  
畝歩ノ平均ニ相當セリ斯クテ疇昔荒蕪タリシ無人列島  
今ヤ聖澤ニ開ヒ次第ニ殷賑ニ赴ケリ  
全列島ニ於ケル事業斯ク其緒ニ就クト共ニ本島トノ交通  
モ從テ繁劇ヲ加フルヲ以テ他ノ借入船及回航船トニ依  
賴スル不便不利甚カラサルヲ以テ全島トノ運輸ヲ圓滑  
ナラシムル爲メ汽船ノ購入ヲ企圖シ明治三十九年三月臺灣  
總督府所有船三浦丸(百四十五噸)ヲ購入シ之ヲ辰島丸ト  
改稱シ該列島トノ交通ニ供スル事トセリ  
珊瑚採取鳥鱒ノ製造及ヒ牧畜業ハ明治四十年度ヨリ  
試ニ着手セシヲ以テ未タ其成績ノ如何ヲ言明スルニ由ラレ  
又該列島ニハ野生ノ桑樹甚々多キヲ以テ今明兩年中



ニハ養殖ヲ試ムル計畫ナリ

全列島附近ノ海洋ハ四時魚族群棲シ恰モ其巢窟ナル  
カノ觀マリ本人ハ是等魚肉ノ罐詰製造ヲ豫テ發意シ居  
ルガ明治四十一年四月本縣島尻水産學校卒業生一名  
ヲ傭聘シ且全校教諭岩井ノ渡島ヲ乞ヒ指導ヲ依頼  
セリ其結果非常ニ良好ナリトノ報告アリ又アジサレ其他海  
鳥ノ肉ハ油リ搾リ残滓ヲ肥料トナシタリシガ岩井ノ案ニ  
依リ罐詰ニ製造スルノ有利ナルヲ認メタレハ併セテ罐詰製造  
ヲ始ムル計畫ナリ

又本人ハ豫ニ該列島ノ土壌ガ燐酸ヲ含有シ居ルガ如ク感  
シタルヲ以テ明治四十年三月福岡鑛山監督署ニ採掘出願

翌四十二年二月上旬京農學博士恒藤規隆ニ商議シ鑽石ノ  
検査シタリ其結果實地踏査ノ爲五月來縣遍ホリ  
列島ヲ探査セシタリ全博士カ踏査中南小島ニ於ケテ諸  
畑ノ中ニ於テ其土壤中ニ多量ノ磷酸(二五パーセント以上)  
ヲ含有セルコトヲ發見セリ全博士ノ說ニ依レハ右磷酸ハ全  
鳥糞ヨリ來リシモノニテ降雨ノ頻繁ナル爲鳥糞中ノ窒素  
及ニ磷酸ノ多分ハ雨水ノ爲メニ流失セルモノ雨露ニ曝サレタ  
ル洞穴岩蔭等ニ堆積セシモノハ其儘ニ能ク保存セラレ以テ  
肥沃ナル土壤ヲ成シタルナリト而シテ此種ノ土砂南小島ノこ  
ヲ採集スルモ數千噸ヲ得ルコト易ク又北小島水禽群棲  
ノ個所ヲ採集セシカ一層多量ノ肥料ヲ得ラルヘシ加之  
全博士ハ更ニ黃尾島ニ於テ鳥糞ノ堆積層ヲ發見シタリ

蓋し黄尾島ハ火山質ノ岩石并ニ玄武岩ノ崩壞シタルモノ  
ヨリ成リ土壤非常ニ吸収性ニ富メリ而シテ全島ニ信天  
翁ノ糞糞スルニト非常ニ多ク且カゴドリハ地中ニ穴ヲ穿  
テ其巢ヲ営シ夜ハ必ス其巢中ニ眠ル其巢ノ多キニト  
數十方ノ上ニ上リ全島悉ク是ニ巢ト云フモ過言ニアラス是  
等鳥類ノ排泄物地中ニ堆積シ全島非常ニ肥沃ニシテ爲  
メニ芭蕉又ハ唐芋ノ如キ徒ラニ繁茂スルニシテ實ヲ結ハズ  
然リト雖モ全島モ降雨ノ頻繁ナルカ爲メ是等夥多ク鳥  
糞モ漸次ニ洗ヒ去ラレ其山中ニアルモノ、如キハ樹蔭落葉  
ヲ以テ十分ニ掩蔽セシタル箇所外ハ肥料的價値ヲ有セ  
ザルカ如シ然ルニ沿岸絶壁ノ上ニ帯ノ葦原アリテ全島ノ周  
縁ヲ圍繞セリ此葦非常ニ能ク繁茂シテ人影ヲ没シ其落

葉ハ積ラニ三寸ノ層リ成シカゴドリハ其中ニ無数ノ巢穴リ  
穿テリ此葦原一帯ノ土壞コリ今曰恒藤博士ノ發見セラ  
レタル鳥糞層ナリトス土色暗黒脂肪光澤リ帯ヒ一種ノ  
臭氣アリ之ヲ火中ニ投スハ煙ト臭氣ヲ發シテ燃燒ス全  
博士ノ說ニ依レハ南洋諸島ヨリ輸入スル guano ト全一ニテ本  
邦ニ於テ他ニ類ヲ見サル好肥料ナリトス來々精密ナル分  
析ト測量トシ終ヘサハ精確ナル記述ヲ爲スリ得スト雖モ  
右葦原ノ面積約五萬坪鳥糞層ノ厚サ約二尺乃至三  
尺尚品質稍下ル部分ニ至リテハ頗ル廣キ面積ニ亙リ本  
人ハ徐ロニ計畫ヲ立テ採掘ニ從事セシトセリ加之右鳥糞  
層ハ採ルニ随テ堆積スルモノナレハ鳥糞ノ濫獲ヲ戒メ其保護  
ニ注意セハ約二十五年ニシテ又今日ノ如クナルベレトハ全博士ノ

意見ナリ

此、他全列島ニ對スル事業ノ經營ハ將來擴張シ又新ニ着手スヘキモノ多クアリ申之カ經營ノ目的ヲ達セハ帝國産業界ニ貢獻スル所頗ル大ナラン

### 九 永久的勞働者移植ノ計畫

茲ニ特ニ記シ置クヘキ一事アリ原來該列島事業經營ガ凡テ永久的方針ナルヲ以テ時期ヲ限リテ渡嶋スヘキ勞働者ヲ僱傭スルニ於テハ後ヲ乘往ノ煩雜費用ヲ費スルコトナラズ彼等技術ガ漸ク熟練ノ域ニ進メル頃ハ既ニ解傭期ニ近ツケルヲ以テ其不利益尠カラズ故ニ主着的勞働者ヲ得ルノ極メテ利益ナルヲ感シタリ而シテ先ツ試驗的ニ四十一年五月宮成福島ニ縣ヨリ七歳乃至十一歳ノ貧兒十一名ヲ丁年

迄ノ契約ニテ雇入レ渡島セシムルコトセリ但シ右ノ中ニ名ヲ除  
ク外ハ凡テ不就学児童ナルヲ以テ該列島移住者ノ一人ナル山  
形縣師範學校卒業生ヲシテ之ガ教育ノ任ニ當ラシムル  
豫定ナリ

一、自明治三十年  
至明治四十年十一年間尖閣列島事業

經營費汽船航海回數及產物採収  
價格

明治十七年初メテ尖閣列島ノ經營ニ著手シタルヨリ今三十  
九年九月開拓認可セラル迄ノ事業ハ必スシモ規則立テ  
タリ方法ヲ以テナスコト能ハサリシ事業アリシノミナラスコレニ要  
シタル經費等俄カニ計算シ難キモノアルカ故ニ開拓認可後  
ヨリ明治四十年ニ至ル迄十一年間ニ要シタル經費其他ヲ左

表示ス

(一) 自明治三十年至明治四十年 十年間事業經營費

年別

摘要

要

金額

額

三十年

漁船製造並、水夫手當金

二、八〇〇〇

〇〇〇

糧食並、諸經費

三、七〇〇

〇〇〇

出稼者手當並、報酬金

四、九〇〇

〇〇〇

計

一、一、四〇〇

〇〇〇

三十一年

汽船須磨丸回航費

三、〇〇〇

〇〇〇

糧食並、諸經費

一、三〇〇

〇〇〇

出稼者手當並、報酬金

九、六〇〇

〇〇〇

計

四、九〇〇

〇〇〇

元公員手當並、向公田元費

六、〇〇〇

〇〇〇

計

三十三年

糧食並諸經費

出稼者手當並報酬金

汽船永康丸借入料

糧食並諸經費

出稼者手當並報酬金

計

三十四年

汽船仁壽丸回航費

糧食並諸經費

出稼者手當並報酬金

計

三十五年

汽船仁壽丸回航費

二二,〇〇〇

八,六〇〇

三六,六〇〇

六,〇〇〇

三五,〇〇〇

一四,五〇〇

五五,五〇〇

四,〇〇〇

一七,六〇〇

一三,八〇〇

三九,四〇〇

二七,〇〇〇



糧食並諸經費  
出稼者手當並報酬金

計

三十六年  
汽船仁壽丸回航費

糧食並諸經費

出稼者手當並報酬金

計

三十七年  
汽船仁壽丸回航費

糧食並諸經費

出稼者手當並報酬金

計

汽船求易公司航費

九、四〇〇

一、四六〇

二、六七〇

三、七〇〇

八、五〇〇

一、五八〇

二、七〇〇

三、七〇〇

九、三〇〇

三、〇〇〇

三、四〇〇

四、五〇〇

糧食並諸經費

出稼者手當並報酬金

計

三十九年

汽船球陽丸回航費

糧食並諸經費

出稼者手當並報酬金

計

四十年

汽船回航費

糧食並諸經費

出稼者手當並報酬金

計

累計

二一九〇〇〇〇

二七七〇〇〇〇

四四一〇〇〇〇

五、四〇〇〇〇

一六三〇〇〇〇

三七六〇〇〇〇

五九三〇〇〇〇

九、五〇〇〇〇

一八六〇〇〇〇

四〇、六五〇〇〇

六八、七五〇〇〇

四二四、三五〇〇〇

(二) 自明治三十年十一月至明治四十年年間汽船回数

年別 船名

噸數 回数

三十年	須磨丸	千六百餘噸	二回
三十一年	須磨丸	各千六百餘噸	四回
三十二年	須磨丸	四百六十餘噸	二月間 借入航行
三十三年	永康丸	四百六十餘噸	四回
三十四年	仁壽丸	全	三回
三十五年	全	全	三回
三十六年	全	全	四回
三十七年	全	全	四回
三十八年	球陽丸	七百七十餘噸	五回
三十九年	全	全	六回

四十年

球陽丸、辰島丸、仙頭丸、宮島丸、三笠丸

十一回

75

(三) 自明治三十年至明治四十年十一年間產物採収價額

年別	品名	數量	單價	價額	格
三十年	鳥毛	一萬七千斤	四拾錢	六八〇〇〇	〇〇〇
計	海產物			七、五〇〇	〇〇〇
三十二年	鳥毛	六萬五千斤	四拾七錢	三〇、五五〇	〇〇〇
計	海產物			九、六〇〇	〇〇〇
三十二年	鳥毛	八萬五千斤	五拾錢	四二、五〇〇	〇〇〇
計	海產物			一三、〇〇〇	〇〇〇
計				五五、五〇〇	〇〇〇

計	三十六年	計	三十五年	計	三十四年	計	三十三年
海產物	鳥毛	海產物	鳥毛	海產物	鳥毛	海產物	鳥毛
	七千六百斤		九千斤		一万三千斤		二万五千斤
	壹拾五錢		壹拾五錢		壹拾五錢		壹拾錢
一七七八〇〇〇〇	四一八〇〇〇〇	二〇九五〇〇〇	四九五〇〇〇〇	二一五五〇〇〇	一四四〇〇〇〇	七一五〇〇〇〇	三六八〇〇〇〇
一三六〇〇〇〇	一六〇〇〇〇〇	一六〇〇〇〇〇	一六〇〇〇〇〇	一六〇〇〇〇〇	一六〇〇〇〇〇	一六〇〇〇〇〇	一六〇〇〇〇〇
一六三〇〇〇〇	一六三〇〇〇〇	一六三〇〇〇〇	一六三〇〇〇〇	一六三〇〇〇〇	一六三〇〇〇〇	一六三〇〇〇〇	一六三〇〇〇〇

三十七年

鳥毛

四千六百斤

六拾錢斤

二七六〇〇〇〇

剝製

拾參方羽

拾四錢羽

一八二〇〇〇〇

鳥肉肥料

四錢八厘

一七七六〇〇〇

鳥油

百六拾函

四錢八厘

四八〇〇〇〇〇

海產物

六拾錢

一三五〇〇〇〇

計

三十八年

鳥毛

七千五百斤

六拾錢斤

四五〇〇〇〇〇

剝製

拾六方羽

拾五錢羽

二四〇〇〇〇〇

鳥肉肥料

四萬三千斤

四錢五厘

一九三五〇〇〇

鳥油

卅百函

六拾錢

六四〇〇〇〇〇

鯉節

一萬三千斤

六拾錢

七八〇〇〇〇〇

海產物

六拾錢

一三五〇〇〇〇

計

三十九年

鳥毛

一万三千斤

七拾五斤

五三三七五

割製

二十四万羽

拾四斤

三三六〇〇

鳥肉肥料

六万五千斤

四錢五厘

二九三五

鳥油

叁百拾五函

叁拾五斤

一〇〇八

鯉節

六万八千斤

六拾五斤

四四二〇〇

海產物

三九七〇〇

計

四十年

鳥毛

一万六千斤

七拾五斤

一一二〇〇

割製

四十二万羽

拾四斤

五八八〇〇

鳥肉肥料

十一万斤

四拾五斤

四九五〇〇

鳥由

四百七十函

肆拾五斤

六六四五

鯉節 六万五千斤 七拾五銭

海産物

四八七五〇  
八六〇〇  
一三四七四五  
五二五三九九

累計

一、明治四十一年度以降火閣列島經營豫美書

明治四十一年以降全四十五年ニ至ル五十年間ニ於ケル火閣列島事業經營上収支豫算ヨリ五ツルコト左ノ如シ

(一) 支出ノ部

年別

橘

要

金

額

備考

四十一年

鯉船五艘珊瑚採取船五艘製造費

四七五〇

新造

監督者三人漁夫百五十人並ニ珊瑚採取者三人  
合計百四十八人當並ニ報酬金七ヶ月分

二一、〇三二

新規雇入

家屋五百坪築造費

一五、〇〇〇



四十二年

樟樹及松其他雜木植付十萬本年度  
二萬本、割

判製監督者三人外百五十人手當報酬金  
七月分

築港岩石破碎千八百坪五十年建築費  
一十年分

諸雜費

糧食費

交通費 十二航海

計

輕船二艘珊瑚採取船五艘製造  
費

監督者三人外漁夫並輕部製造者百五十  
人珊瑚採取者四人其手當並報酬金

家屋增築費五百坪

樟樹並松其他雜木植付

判製監督者三人製造者百五十人手當

四〇〇〇〇〇

二三四九一〇〇〇

一八〇〇〇〇〇〇

三〇〇〇〇〇〇

二一三一二〇〇〇

九六〇〇〇〇

一五五七四〇〇〇

二五〇〇〇〇〇

二八九九九〇〇

一五〇〇〇〇〇

四〇〇〇〇〇

二三四九一〇〇

新造

増失  
五十四人

築港繼續費

諸雜費

糧食費

交通費 十二航海

計

四十三年

經船三艘珊瑚採取船五艘製造費

監督者三人並、漁夫三百三人珊瑚採取者  
五人手當並、報酬金

樟樹並松其他雜木植付

監督者三人利製者百五十八人手當并、  
報酬金

築港繼續費

諸雜費

糧食費

一八〇〇〇〇〇〇

三〇〇〇〇〇〇

三三二〇〇〇〇

九九六〇〇〇

三三二五〇〇〇

三二五〇〇〇〇

四一六〇〇〇

四〇〇〇〇〇

二二四九一〇〇

一八〇〇〇〇〇

三〇〇〇〇〇〇

三一三九二〇〇

新造

交通費

計

四十四年

鯉船五艘珊瑚採取船五艘製造費

監督者三人漁夫三百五十人珊瑚採取者八十八人手当並報酬金

樟樹並松其他雜木植付

監督者三人刺製者百五十人手當并報酬金

築港繼續費

諸雜費

糧食費

交通費

計

四十五年

鯉船三艘珊瑚採取船五艘製造費

九、六〇〇、〇〇〇

三、九七三、四〇〇

四、七五〇、〇〇〇

四、四五四、〇〇〇

四、〇〇〇、〇〇〇

三、四九一、〇〇〇

一、八〇〇、〇〇〇

三、〇〇〇、〇〇〇

三、二八三、二〇〇

九、六〇〇、〇〇〇

三、五六一、四〇〇

二、五〇〇、〇〇〇

新造

更雇人  
二百人

新造

監督者三人 漁夫三百三十人 珊瑚採取者百人  
 手當並報剛金  
 監督者三人 刑製者百五十人 手當並報  
 剛金

四七四八一〇〇〇

築港繼續費

一八〇〇〇〇〇〇〇

諸雜費

三〇〇〇〇〇〇〇

糧食費

三四三七二〇〇〇

交通費

九六〇〇〇〇〇

計

三三三三四〇〇〇〇

(二) 収入ノ部

四十一年

金八万八千四百圓

艇船十艘十三万六千斤

金参万四

珊瑚船五艘收入

金壹万五百圓

鳥毛壹万五千斤

金五万六千圓

鳥剥製四拾万羽

金千六百八拾圓

鳥油五百貳拾五函

金四千八百六拾圓

鳥肉肥料拾萬八千斤

金壹萬五千圓

海產物

計金貳拾萬六千四百四拾圓

四十二年

金拾萬六千八拾圓

鑿船主艘拾六萬零千貳百斤

金六萬圓

珊瑚採取船十艘收入

金壹萬五百圓

鳥毛壹萬五千斤

金五萬六千圓

剝製鳥四拾萬羽

金四千八百六拾圓

鳥肉肥料拾萬八千斤

金千六百八拾圓

鳥油五百貳拾五函

金壹萬五千圓

海產物

計金貳拾五萬四千四百貳拾圓

金拾萬貳千六百圓

金九萬圓

金壹萬五百圓

金五萬六千圓

金四千八百六拾圓

金千六百八拾圓

金壹萬五千圓

計金參拾壹萬六千四百圓

四十四年

金拾七萬六千八百圓

金拾貳萬圓

金壹萬五百圓

金四千八百六拾圓

鯉船二十五艘貳拾萬四千斤

珊瑚船十五艘收入

鳥毛壹萬五千斤

剝製鳥四拾萬羽

鳥肉肥料拾萬八千斤

鳥油五百貳拾五函

海產物

鯉船二十五艘貳拾七萬五千斤

珊瑚船二十艘收入

鳥毛壹萬五千斤

鳥肉肥料拾萬八千斤

25

四十四年

金五万六千円

金千六百八拾円

金壹万八千円

計金参拾八万七千八百四拾圓

剥製鳥四拾万羽

鳥油五百貳拾五函

海產物

四十五年

金拾七万六千八百圓

金九万円

金壹万五百円

金五万六千円

金四千八百六拾円

金千六百八拾円

金貳万円

計金参拾五万九千八百四拾圓

鯉船三艘貳拾七万貳千斤

珊瑚船三艘收入

鳥毛壹万五千斤

剥製鳥四拾万羽

鳥肉肥料拾万八千斤

鳥油五百貳拾五函

海產物

一、本縣官吏、列島視察

光閣列島視察ノ爲出張セシ本縣官吏氏名及年月左  
ノ如シ

一、明治三十三年元八重山島司野村道安管内視察  
トシテ出張セリ

一、本人、明治三十四年五月元本縣技師熊倉工學士、  
出張シ乞ヒ設計、其他ノ点ニシキ指導ヲ仰キ、  
又全便ニテ本縣土地整理事務局員數名渡航  
調査セリ

一、明治三十七年本縣事務官岸本賀昌八重山島廳  
書記中島謙次郎及ヒ元八重山島警察署長  
宮原景明、三人相前後シテ出張セリ



一明治四十年九月本縣技師大山勇者情況視察、  
為出張セリ

一明治四十年十月八重山警察署長内田輔松警  
部春田昂及ヒ本縣堀内藥劑師出張セリ

一三、尖閣列島以外、無人島探検及其經營

一、大東島探検 無人島探検リ以テ國益トナスノ觀念ハ  
上記ノ尖閣列島ノミナラス本縣下附近遠クハ南洋ノ無  
人島探検及經營ヲ試ムルリ以テ本人カ最モ愉快トシ  
且邦家ニ對スル義務ヲ盡ス、最モ適當ナル事業トナ  
スニ及ベリ則チ明治二十五年ニハ尖閣列島經營ノ餘暇

ヲ以テ仲繩開運株式會社所有船大有丸（五百四十噸）ヲ  
首レ毎星期勿来又、目内ヲ以テ漁夫四十五名リ随ハ一ト

年ヲ支フヘキ糧食其ノ他ヲ用意シ大東島探檢ニ向ヘリ此  
ノ島ハ那霸ヲ距ルニト東方約三百四十海里ノ洋中ニアル  
無人ノ島嶼ナリ此行天候不良行途ニ寄泊シテ往航十  
日ヲ費シ漸ク大東島ニ着スルニトテ得タリ停船シテ探檢  
ノ準備ニ著手セシトシタルモ沿岸水深到ル處數百尋ニ  
及ヒ錨ヲ投スルニ詮ナリ亦波濤甚ク高ク船体ノ動揺止ム  
時アラサリシカ故ニ徒ニ漂泊スルニトテ晝夜探檢ノ結果同  
島ノ地勢到底海産物ヲ採取ニ適セサルヲ以テ終ニ断  
念シテ歸航セリ

ニイキマ島ノ探檢 萬國地圖ノ示ス所ニヨシハ宮古嶋ノ  
南東即テ東徑百二十五度二十八分北緯二十四度二十三  
分ニ當リテイキマ島アリ 明治三十三年五月光閣列島

航行ノ途次本人ハ之ガ探檢ヲ試シント欲シ汽船ヲ迂行  
セシメ右ノ地點ニ達シタリ折柄天氣晴朗一朶ノ雲霧  
ノ展望ヲ遮キルモノナク探檢上有利ノ一日ナリト雖  
モ地點ヨリ約二十方哩以内ニハ一小島影ヲモ認ムルシ  
能ハサリレリ以テ更ニ遠ク附近ヲ探リシモ終ニ何等ノ  
得ル所アラサリキ

三、セキビ島ノ探檢  
オト全一航海ニ於テセキビ島ヲ探檢セ  
リ此島尖閣列島ノ東北六十哩ヲ距ル地點ニ在リ探檢ノ結  
果到底居住ニ適セサルヲ認メ之ガ経営ヲ断念シ紀念ノ  
為一標木ヲ樹立シテ歸航セリ此行宮島理学士黒岩師  
範教諭ノ同航アリシヲ以テ標木ノ文字ハ右西氏ノ染筆  
ヲ頗ハシ一ハ英文ヲ以テ他ハ邦文ヲ以テ標木ノ西面ニ之ヲ

録セリ

四、沖ノ神島ノ探検及其ノ經營 沖ノ神島ハ東經百二十三度三十三分北緯二十四度十三分ニアル無人ノ小孤嶋ナリ本入ハ往年實地探検ヲ試ミタルニ水禽群棲シ沿岸又海産物ニ豊富ナルヲ以テ畫策宜シキヲ得ハ必ず有望ノ地タラント認メ直ニ拜借ノ許可ヲ請願シタリニ明治三十八年一月之カ許可ヲ得タリ而シテ目下全島ニハ出稼勞働者二十三名監督ニ名ヲ派遣シテ之カ經營ニ着手セリ此島ニ於ケル一般規模ハ凡ニ尖閣列島ノ範ニ則ル方針ナリ此ノ島ニ於ケル事業經營ノ梗概ハ次項ニ記載セリ

一四、沖ノ神島事業梗概

沖神島借用認可シ得タルハ明治三十八年一月ナリシモ  
 當年ハ諸他ノ設計ニ多忙ナリシカ故ニ其ノ翌年乃チ  
 明治三十九年三月ヨリ事業ニ着手セリ全島ハ八重  
 山郡西表嶋ヲ距ルニト西方僅カニ七海里ニ過キサルヲ以テ  
 傳馬船ニ艘列舟五艘ヲ以テ交通機關ニ充用セリ又  
 今年七月廣運株式會社所有船球陽丸ヲ特派シ四十  
 年八月更ニ汽船辰島丸ヲ派遣セリ本人ハ全島經營ニ  
 着手以來日尚ホ淺ク比ノ間未タ投資ノミニシテ純益ナシト  
 雖モ採収セシ産物ノ種類價格ハ左ノ如シ

種類	數量	單價	價額
水禽羽製	六万羽	拾四錢 <small>拾四錢</small>	八、四〇〇、〇〇〇 <small>四</small>
鳥肉肥料	壹万四千斤	四錢八厘 <small>拾四錢</small>	六、七二〇、〇〇〇

鳥油	七十函	二二四	〇	〇
海産物		一六〇	〇	〇
合計		一〇八六	〇	〇

老函  
考田計指錢

一五 (附録) 難破船ノ救護

明治三十三年五月十三日臺灣臺北建昌街熊野高業株  
 式會社支店長佐々木嘉十郎氏所有汽船備前丸(船長  
 中田定吉噸數凡六十噸)那霸宮古島ヲ經由シテ臺灣基  
 隆ヘ向テ航行中強烈ナル風雨ニ會ヒ損傷ヲ被リ殊ニ海  
 圖ヲ風ニ奪ハレ爲ニ針路ヲ失シ宮古島ヘ寄港スル能ハ  
 ス數日間洋中ニ漂流ノ後漸ク釣魚島(一名和平山)ニ漂着  
 セリ故ニ全島事務所ハ全船ニ對シ海圖ヲ與ヘ出帆セシメ  
 タリ而シテ該船ニハ宮古島ニ上陸スヘキ船客三人(巡查一名

普通客ニ名アリシ本島ニ逗留セシメ便船ヲ令全島ニ送  
還セリ

又明治三十五年五月十八日久場島(黄尾島)事務所  
背部ノ断崖ノ海岸ニ刳舟一艘漂着セリ乗船者ハ  
宮古島ノ漁夫ニ名ニシテ一週間餘漂流シ飢餓ニ迫  
リ何レモ疲勞シテ歩行スル能ハス半死半生ノ状態ナリ  
シヲ以テ本人ノ事務所ハ藥餌ヲ供給シ療養セシメ二  
ヶ月餘滞留セシメ後汽船仁壽丸ニ便乗シテ歸島セ  
シメタリ

一六(附録)地圖及寫真

以下省略